

私立大学横山助教授 最終話

横山が大学を辞めてから二月ほどして、山田は横山から呼び出しを受けた。中村は新人議員であるにもかかわらず、いきなり行政改革特命大臣に任命された。

「改革に反対する事務次官はやめてもらう」と宣言して話題をさらっている。

各省庁は、改革への総論には賛成という態度をとりながら、いざ、自分の省庁の予算が減るとなると、徹底的に抵抗する。

中村は、首相を説得して、予算削減目標を各省庁に提示したうえ、もし、それが達成されないならば、予算を一律二割カットとすると宣言した。どんなに重要な案件を抱えていると主張しても、受けいれないと名言した。

さらに、公務員の天下りを全面的に禁止するという法案を提出した。現在、地方自治体や公益法人に中央官庁の役人が出向しているが、これも全面的に禁止するとしている。

例えば、中央官庁の役人が、地方の県庁に出向すると、三十歳前でも、いきなり課長などの要職につく。これが中央と地方の癒着の原因となっている。また、公益法人への天下りは、意味のない組織の数を増やす原因となっている。天下りした役人に給与を与えるためだけに、補助金を得ている組織が山のようにあるからだ。これが、無駄遣いの元凶になっている。

しかし、山田は、中村のこれら政策は骨抜きにされるだろうと思っている。もちろん、実現されれば、日本は良くなるかもしれない。しかし、国の借金を減らして得する政治家はほとんどいない。

もちろん、将来の国民に迷惑をかけることになるが、もともと他人に迷惑をかけることを気にする人間が国会議員になるはずがないのである。中村のように、金儲けを目的とせず、天下国家のために議員になりたいというような人間はほとんどいない。

横山は父の中村の本音を聞いたことがある。日本の官僚制度には大きな問題があるが、それよりも問題なのは、意識の低い国会議員がやまのようについて、

それが、日本の政治をゆがめているということであると。

中村は、可能であれば、衆院議員の数を一〇〇まで減らし、参議院を廃止すると言っていた。中村が首相になれば実現可能かもしれないが、これは無理であろう。自分たちに不利なことを主張する首相を選ぶ議員など皆無だからである。

山田は、久し振りにあう横山にこう言った。

「いまの中村先生の活躍を見ていると、横山先生がとった作戦は正しかったかなとも思います」

「山田先生。でも父はそのうちに、味方のはずの与党の議員たちからも煙たがられると思いますよ。というのも、父には私心がないからです。

父を持ち上げた民自党の連中は、自分たちの利益になるからと父を応援したのであって、改革を進めたいという気は全くありません。

父の主張が通ると、自分たちに不利なことがたくさん出てきます。事実、すでに、官僚には、父に重要な情報を渡すなど命じているようです」

山田は、横山は確かに変わったと思った。しかも、単に知識が増えただけではない。ものごとの表層だけではなく、その裏にある真実も見抜いている。

「ところで、今日はどうされたんですか。横山先生からぜひ会いたいと言われてびっくりしました」

最近、典子とばかり連絡をとっている横山に少し嫌味を言ったつもりだったが、横山には、それは伝わらなかったようだ。それが横山のいいところなのだが。

「実は、今度アメリカに渡ることになりました。その報告と、それから、山田先生にはぜひお礼を言いたかったものですから、お忙しい先生をお呼びたてしました」

「えっ、アメリカですか！」

「はい、今度、アメリカの大学の博士課程に進学することにしました。頑張つて、本物の博士号を取得するつもりです」

山田は驚いた。実は、横山が黎明学園大学を退職したと聞いて、複数の大学からオファーがあったはずなのだ。横山が学生に人気があるということは、退職したあとの生徒たちの嘆願運動でよく分かったはずである。

いまどきの大学で、先生が辞めたからといって、学生が立ち上がることなどまずない。むしろ、辞めたら学生が喜ぶ教授の方が圧倒的に多いはずである。大学の経営者も、その辺の事情は察している。それに、週刊誌で話題になった横山は、問題児に思えるが実はそうではない。

最近の学生は、さっぱりしたもので、話題の人物に会えるかもしれないというだけで興味を覚える。しかも、横山は、税金を食い物にしている政治家や官僚のような本当の悪党ではない。話題の人物が大学に居るということだけで、結構、宣伝になるのだ。

「わたしは、てっきり、先生はどこかの大学に移るものとばかり思っていました」

言い方が正しいかどうか分からないが、横山は引き手あまたなのだ。

「いえ、私は、もう一度黎明学園大学に挑戦するつもりです」

何を言い出すんだらうと山田は思った。

「私は、山田先生が大好きだから、もう一度先生と同じ職場で頑張りたいんです。それに田村理事長が、この大学を設立した趣旨にも大いに賛同しています。しかし、いまの自分には、その資格はありません。自分を磨いてもう一度挑戦したいのです。」

山田は、思わず涙がでそうになった。自分を好きだと、このひとは言ってくれている。いままで、友人から、そんなことを言われたことはない。

「山田先生と出会ったおかげで、私は、はじめて勉強することの楽しさを知りました。恥ずかしい話ですが、この歳になってようやく学問に目覚めたのです。少し、遅すぎるかもしれませんが、人生に遅いということはないと思います」

自分こそ、横山と出会って、素直になることの大切さと、いくつになっても勉強をし続けることの大切さを認識した。

「感謝したいのはわたしのほうです」

と、山田は心の中で叫んでいた。

「私は、小さい頃から両親を悩ませてきました。母が勉強しろと何度いっても勉強しませんでした。

父が有能な学者ということにも、少し反発があったのかもしれませんが。それよりも、もし、自分がいい子になって、父と母を安心させてしまったら、ふた

りは分かれるかもしれないと不安に思っていたのです。

「だから、いつもふたりを心配させる存在でなければならない。漠然とこう思っていました」

ずっと、両親と一緒に過ごしてきた山田には理解できない感傷だった。両親が分かれるなどとは思ってもよらない。子供なのに、それを心配している。横山のことが少し気の毒になった。

「父はわたしを可愛がってくれましたが、忙しいので、めったに家に来てくれません。

父が居る間の一家団欒は本当に楽しいものでした。それだけに、父が帰っていくときの寂しさは、耐えがたいものでした。

「だから、私はいろいろな友達といつも楽しく騒ぐことが好きだったのです。そうしていないと、不安になるからです」

横山が昔から、友達と遊びに遊んでいたという背景にはそんな家庭事情があったのだ。

「しかし、最近変わりました。学問の素晴らしさに出会ってから、ひとりで居ても不安を覚えなくなったのです。

たとえ同じ場所に一緒にいなくとも、人間どうしには、より深い結びつきがあるのだということが分かるようになりました。学問のおかげです」

「横山先生、私の方こそ、先生にお礼を言いたいです。先生のおかげで、わたしの曲がった根性は、すっかりよくなりました。

もし、先生が黎明学園大学に来られるというなら、わたしも最大限のお手伝いをします。私も先生と一緒に職場で働きたい。切実な思いです」

「そう言っていただいて、私もうれしいです。ただ、公募での不正はよしてくださいよ」

横山は冗談を言った。

「ところで、典子には、この話をされたのですか？」

「いいえ、まだです」

「典子はさびしがるのではないのでしょうか」

山田は、はじめて典子と横山の仲に対して理解を示す言葉を吐いた。

「典子さんは、いま一番大事な時期です。博士を目指して、研究の仕上げに入

っています。それに集中して欲しいと思っています」

山田はふと、自分でも思いもよらなかった事を聞いた。

「先生は典子のことをどう思っているのでしょうか？」

横山は、少し考えてからこう言った。

「とても、大切なひとと思っています。可能ならば、一生をかけて守っていき
たい。わたしが、生まれてはじめてそう思ったひとです。でも、そのためには、
自分を磨く必要があります。彼女に恥ずかしくない人間になって戻ってくるつ
もりです」

山田は、ふたりを応援しようと思った。

それから、しばらくして横山はアメリカに旅立った。

山田は、妹の典子にそれとなく聞いてみた。横山が言い残して言った言葉を。
典子は、恥ずかしそうにこう言った。

「あなたに相応しい人間になって帰ってきます。それまで待っていてくれます
か？」

典子はもちろん

「待っています」

と応えた。

でも典子は、心の中で思った。

「いまのあなたこそを私に相応しい人間なのです」

山田は信じていた。そばにいなくとも、人間にはより深い結びつきがあること
を。